

書評 手嶋潤一 著

日光の風景地計画とその変遷

観光地日光その整備充実の歴史

外国人避暑地日光中禅寺

水内 佑輔 (東京大学演習林)

1. はじめに

本稿では、近代以降の日光の観光に関する一連の著作を国立公園史という観点から取り上げる。それは、評者の専門が国立公園史というだけでなく、著者が『国立公園日光』と『観光地日光』は同義語と見てよい」と述べているように、日光において観光行政と国立公園行政は不可分のものであるとされるからである。

さて、日本の国立公園を理解する上では、各地域の国立公園史の整理が欠かせないが、それには日本の国立公園の成立経緯が深く関わっている。

1931年に国立公園法が制定され、1930年代には12か所の国立公園が指定された。日光もその1つである。評者は、これまでに国立公園法は、ゾーニングや道路・施設計画を行う国立公園計画を策定するためだけの法律であり、利用開発や外客誘致は直ちに達成すべき課題とはなっていない建付けになっていることを指摘した(水内2016)。つまり「国立」という名称であるが、計画策定以外の国立公園の実体化は、地域行政や地域社会に委ねられていたのである。したがって、国立公園史は中央行政のみならず、地域(行政)の視点からも描かれる必要があるといえる。加えて、日光国立公園は1930年代に国際観光地としてすでに著名であっただけでなく、本書に示されるように、内務省・厚生省の技官が、栃木県の重要ポストへ出向して、国立公園の実体化が図られた場所であり、その意味からもその歴史は単なる一国立公園の歴史にとどまるものではない。こういった点から、日光国立公園に関する一連の著作の重要性を指摘できる。

2. 書籍の構成と特徴

3つの書籍の章立ては以下のとおりである。

日光の風景地計画とその変遷 (2006) pp.400

- 序章 研究の目的と方法
- 第1章 明治前期から大正後期までの日光の風景地計画
- 第2章 大正後期から昭和戦前期までの日光の風景地計画
- 第3章 終戦直後から昭和中期までの日光の風景地計画
- 第4章 結論と今後の課題

観光地日光その整備充実の歴史 (2016) pp.448

- 第1部 観光行政
 - 第1章 明治期
 - 第2章 大正期
 - 第3章 昭和戦前
 - 第4章 戦時中(昭和16～20年)
 - 第5章 戦後復興期(昭和20～29年)
 - 第6章 経済成長期(昭和30～47年)
 - 第7章 安定成長期以降(昭和48年～)
 - 第8章 観光行政のまとめ
- 第2部 国際観光
 - 第1章 西洋人避暑地日光中禅寺の幕開き
 - 第2章 避暑地中禅寺が外国人に認知・認識されてゆく過程
 - 第3章 国際的避暑地中禅寺の実相
 - 第4章 戦中・戦後・経済成長期の日光に見る国際観光
 - 第5章 国際観光のまとめ
- 第3部 交通運輸
 - 第1章 交通機関整備以前
 - 第2章 鉄道開設以降
 - 第3章 自動車輸送開始以降

れている。対象とする地理的スケールが異なり、またフィジカルプランの立案にまで至っていないものも取り上げられているが、関連する貴重な資料等も用いてそれぞれの計画の背景が分析されている。そして、これら過去の計画の分析から得られる知見とはいったい何なのかという点が、第4章第2節「これからの風景地計画」で述べられており、空間制度に関する歴史研究の意義が示されている。つまり、単なる懐古的・歴史的な事情の掘り起こしではなく、現在や将来の国立公園を考える上で重要な知見となり得るということである。そこから導き出される筆者の主張は、端的に言えば、風景の保護と利用を一体として考えること、現状を改良する積極的な風景保護というものである。

資料の掘り起こしと整理という点での最たるものは、『外国人避暑地日光中禅寺』における明治期の中禅寺湖畔の外国人別荘の空間的分布を再現した点にある。ドイツの外交官のカール・ゲオルク・フォン・トロイラー作成のドイツ語で記入されたラフスケッチを基礎に、その他資料から考証を加えつつ、湖畔の別荘群の位置が明らかにされている。著者とこのスケッチとの出会いについては深く語られてはいないが、トロイラーの子孫である Bertha von Ledebur 博士との偶然の出会いがあったようである。また、本書では特に、行政資料にとどまらない地域史資料が使われており、宿屋の帳簿などまでが著者の検討の対象となっている。こういった地域史資料には、日光の郷土史家・小島喜美男氏が整理保存してきたものもあり、小島氏の貢献の大ききさもうかがえる。

4. 県レベルでの国立公園史

先述したように、昭和初期の国立公園行政においては、予算上の制約から、当面は国立公園計画の策定のみを行うものとなっていた。利用施設の設置や交通網の整備等では、地域行政にも予算支出が求められており、国立公園の実体化には、県レベルでの活動が不可欠であるため、こういった地域行政の動きをみるのが国立公園史として重要である。

『日光の風景地計画とその変遷』では、7つの分析の視点が用意されている。その1つに「県の役割」があり、1928年の内務省の「道府県立公園調査」に対する県の対応や、栃木県国立公園協会の活動などが明らかにされている。また、『観光地日光その整備充実の歴史』では、第1部が「観光行政」と題され、栃木県の観光行政の流れが整理され、社会的背景の中で日光国立公園がどのように実体化していったのかが理解できる。

都道府県において国立公園をどのようなセクションで管轄するかは、各都道府県によってそれぞれであり、時代によっても異なる。栃木県においては、昭和初期には経済部土木課で所掌され、戦後に商工部観光課、1972年には林務観光部環境観光課、1989年に林務部自然環境課となったとされる（なお、現在は環境森林部自然環境課）。こういった所掌セクションにより栃木県における国立公園の位置づけを理解することができ、またその変化からも国立公園を取り巻く状況が把握できる。そして、栃木県においていち早く、観光課というセクションが成立しているが、その背景にある千家哲麿の貢献が『観光地日光その整備充実の歴史』において明らかにされている。

5. 国立公園の実体化に関わるキーパーソン：千家哲麿の栃木県での活動の整理

『観光地日光その整備充実の歴史』では、「第5部 風景地計画家の足跡」において3名が紹介されている。千家哲麿は、国立公園法の制定された1931年に本多静六の東京帝国大学林学科造園学教室を卒業、当時国立公園行政を差配していた田村剛の求めで内務省衛生局に入省した。その後、日光国立公園の指定や計画策定に携わったのちに、1939年からは栃木県に出向して、日光国立公園行政に携わる。一方、田村は「国立公園の父」として広く知られている。田村の仕事はまだ海のものとも山のものとも知れぬ国立公園という概念を導入し、法制度として立案したといえる。千家の仕事は、図上に示された国立公

園という理念を、栃木県において現実の空間上に実体化していくことであった。千家は、1954年まで（1946年からは観光課長として勤務）の15年間の長きにわたって、栃木県において国立公園の実体化に携わる。その後、厚生省に戻り、国立公園計画課長、国立公園協会会長などを歴任し、「ミスター国立公園」といわれるなど、日本の国立公園制度を支え続けた。本書では、野外レクリエーションとしてのスキーの啓発と普及、標識のデザインの統一、観光課の設置、GHQとの調整、御用邸の経営、栃木県観光協会の運営、栃木県観光総合計画の策定、日光国立公園博物館（ビジターセンターの機能が付与）、集団施設地区の整備、戦場ヶ原の保護、国立公園指導員（県のレンジャー）の導入など、千家の栃木県における国立公園行政での活躍が整理されており、県レベルでの国立公園の実体化の作業が理解できる。

6. おわりに

日本の国立公園史は、主として国立公園行政に携わった技術官僚（レンジャー）によって整理されてきた感がある。繰り返すが、日本の国立公園は、地域との連携なしには成立しない仕組みとなっており、それぞれの国立公園が抱える資源や地域性によって国立公園の特徴も異なる。本稿で取り上げた一連の著書は、栃木県の技術者が、自らが携わった日光国立公園の歴史を整理したもので、これによって国立公園の実体化の過程が浮かび上がってくる。そして、それらは今後の国立公園を考える上での重要な知見となるため、他の国立公園でもこういった歴史の整理の取り組みが望まれる。

ところで、冒頭にも触れたが、『観光地日光その整備充実の歴史』の13頁において「『国立公園日光』と『観光地日光』は同義語と見てよい。地元にとって大きな違いはない」と述べられる。長年、日光国立公園に県の技術者として関わった実感からきたものと思われる。しかし、国立公園という観点からみたときに、観光と国立公園が同義語という感覚が地域に定着していることをどのように考えればよいのだろうか。この文章における著者の論旨は、日光における国立公園と観光は、双方とも資源の保護と利用の両立を考えるため両者は同義であるという意味であろう。しかし、近年国立公園とはどういった空間であるのかが問われている中では（田中2008）、重要な問題提起となるようにも思える。いずれにせよ、一連の書籍は日光国立公園、そして日本の国立公園の将来を考える上で重要なものとなっている。

参考文献

水内佑輔・古谷勝則（2016）国立公園法成立をめぐる政治過程とその背景．日本建築学会計画系論文集，82(733)：635-645.

田中伸彦（2008）日本の国立公園が歩んできた道—国立公園だからこそ期待すべきものは何か—．森林科学，53：14-17.

（『日光の風景地計画とその変遷』随想舎、2006年5月、400頁、2,800円＋税

『観光地日光その整備充実の歴史』随想舎、2016年4月、448頁、2,800円＋税

『外国人避暑地日光中禅寺』随想舎、2021年3月、292頁、2,800円＋税）